

戦後西ドイツ司法の暗部を告発したフェルデ  
イナント・フォン・シーラッハの同名の小説を  
映画化した作品である。

二〇〇一年ベルリンの高級ホテルで、大企業  
の重役ハンス・マイヤーが惨殺される。犯人は  
在独三〇年以上のイタリア人ファブリツィオ・  
コリーニだった。新人弁護士でトルコ出身のカ  
スパー・ライネンが国選弁護士として彼の弁護

コリーニ事件  
(ドイツ・2019)



に当たることになる。実はライネンにとって、  
マイヤーは親同然に自分を育ててくれた大の恩  
人だった。ライネンはそれを受任直後に気付く。  
その葛藤を棚上げにして、弁護士の職務を全う  
しようと決意する。

ところが、接見に行くとコリーニは黙秘を貫  
くばかりだった。最後の切札として、ライネン  
はトルコ出身である身の上を明かして、イタリ

アから来たコリーニの口を開かせようとする。  
だが通じない。もはやここまでとライネンは接  
見室を出て行こうとする。ここでついにコリー  
ニが言葉を発する。「親は健在か」と。「そうだ」  
と答えるライネンにコリーニは「大切にしろ、  
いつまでもいると思うな」と返す。このやりと  
りの意味があとでわかる。

ライネンは打開の糸口を求めて、コリーニの  
生まれ故郷イタリアのモンテカティーニ  
を訪ねる。そこで大きな手がかりを得  
る。コリーニの父親は一九四四年に若く  
して亡くなっていたのだ。調査を進める  
と、マイヤーはナチの親衛隊(SS)の  
将校でこの地方を統轄していたことがわ  
かる。統轄下のピサでパルチザンのテロ  
によりSS隊員二人が殺される事件が起  
こった。マイヤーは報復として、一〇倍

の二〇人の処刑を命じる。「人狩り」の地に偶  
然指定されたのがモンテカティーニだった。  
そして、コリーニの父親が二〇人のうちの  
一人にされてしまう。マイヤーはまだ子ども  
コリーニを腕に抱えて「強くなるためによく  
みるんだ」と父親の射殺シーンをコリーニ  
に見せつける。それ以来、マイヤーへの復讐が  
コリーニの生涯の目標となる。戦後、この事件で

コリーニは西ドイツ政府を告訴する。しかし、  
一九六〇年代にアデナウアー政権はナチの戦争  
犯罪を不問に付す法律を制定していた。加えて、  
今回の裁判でマイヤーの公訴参加代理人を務め  
る刑法の大家マッティンガーが、その立法作業  
に携わっていたことが判明する。ライネンもマ  
ッティンガーの教えを受けていた。

ひるまずにライネンは、法廷で恩師に容赦な  
くこの法律の不当性を質す。これが法治国家と  
いえるのか、今の国際法からすれば戦争犯罪だ  
と迫る。ついにマッティンガーは「そのとおり  
だ」と認める。胸がすく大逆転の瞬間である。  
判決を言い渡す翌日の法廷で被告人席にコリ  
ーニの姿がない。いやな予感が走る。案の定だ  
った。やがて入廷した裁判長が、コリーニは拘  
置所内で自殺したと告げる。その少し前にコリ  
ーニの房内の様子がはじめてワンカット映し出  
されていた。これが伏線だったのだ。

裁判長は被告人を「さん」付けて呼んでいた。  
日本でも無機質な「被告人」ではなく、この呼  
び方を導入すべきではないか。これだけは書かずにお  
きます！

(二〇二〇年六月二十八日・新宿武蔵野館)  
(にしかわ・しんいち/明治大学教授)